様式３　【物・文化財・風景など実体のあるもの】

ふくしまの森林文化調査カード

県 HP公開（ 可・否 ）

区分	1.森づくり　2.森の恵み　3.森と技 4.森と暮らし　5.森の文化財　6.森の風景	
分野（ふりがな）	（分野） 囲炉裏	（ふりがな） いろり
地域独特の呼び方	炉	ゆるり
タイトル	ユルリで煮る	
伝承地域	金山町山入（町内一円）	
由来（年代）	（いつ、どこで、誰によって起こり、どのようにして現在まで（いつまで）伝えられてきたか） 囲炉裏は、食物の煮たき、照明、暖房と多岐にわたり、家の中心的な存在であった。また、一家だんらんの場であり、着座場所が決まっているなど家族内の序列秩序を示す機能もあり、封建的な生活を象徴していた。	
内容	（内容と共に、行事・祭りの場合は実施の時期、郷土料理の場合レシピなども） 「ユルリ」は囲炉裏の地方の呼び名で、地炉、ユルイなどの呼び名もある。形態も地方により特有のものとなっている。 普段の煮炊きはユルリ（炉）で行い、飯を羽釜でかまどにかけて炊くことはなかった。味噌汁も飯と同様に、鍋でユルリのカギノハナ（自在鉤）にかけて煮た。かまどはスエガマとかカマドと言い台所の隅に設けてあり、ツバガマ（羽釜）をのせ、セイロを重ねて餅つきの糯米をふかした。他には味噌造りの時に使った。麻などの作業で大量に湯が必要なときは、スエガマを使った。ユルリを取り囲む炉の縁をマッコとかユルリブチと言い、お茶を飲むときに湯飲み茶碗やお茶受けの漬け物、時には椀飯も置くなど、マッコは膳や盆の役割もしていた。 ユルリで使用する用具としては、ゴトク（五徳）、ユッカマ（湯釜）、ヒバシ（火箸）ハイガキ（灰掻き）、ワタシなどがある。ワタシにのせて餅を焼き、串に刺した魚も焼いた。ヤキモチやジャガイモなどもホド（火所）近くの灰の中で焼いた。	
大きさ・材質	（大きさ：緑の文化財、巨木、建造物などスケールが情報として有用なもの。） ―	（材質） ―
見頃	（緑の文化財、巨木など特定の時期に見頃が訪れるもの。） ―	
交通アクセス	―	
文化財等の指定状況	―	
問い合わせ先	金山町教育委員会　電話 ０２４１－５４－５３３３	

【フリーフォーマット】

キーワード

＜江戸中期の民家＞

（会津民俗館）

写真の民家は、江戸中期（約 300 年前）に建てられた中流農民の家屋である。「ユルリ」の奥は「ザシキ」と呼ばれる板張りの部屋で、盆や正月のような祝い事の時だけ畳を入れた。普段の生活は土間での生活であり、もみ殻や藁の上に莚を敷いて寝起きしていた。

江戸時代の農家は、耕作面積によって家屋の大きさが制限されていた。